

INTERNATIONAL ERIC NEWSLETTER

No.6

APRIL 1991

エリック ニュースレター

国際理解教育・資料情報センター International Education Resource & Information Center

特集：思いやりを育てよう

昨年11月14日(13~21時)、東京でERICグローバル・セミナー「オーストラリアの思いやり教育の実践に学ぶ」が開かれました。講師のラルフ・ペットマン氏は、世界的な人権教育の権威。このとき紹介された、思いやり、共感、個の尊重の態度や姿勢を培うための具体的な手法を特集してお届けいたします。

事例 1：

目かくし散歩

- ねらい：
- ・人を信頼することの大切さを知る。
 - ・人の気持ちや立場を考える姿勢を培う。
 - ・信頼に応えられる責任感を育てる。

展開：

- 1 2人1組でペアを組む。一方が目をつむり、もう一方が案内をする(目かくしをしてもよい)。
- 2 各ペアは約5~10分間、教室や校舎の中を散歩する。「案内をする人は、『目の見えないお友だち』に、手や足でいろいろな物にさわったり、誰かに会ったり、一緒に音を聞いたり、できるだけたくさんの体験ができるようにしてあげてください。」
- 3 約5~10分後、役割を交替して同じように行う。
- 4 教室に戻り、気づいたことなどを話し合う。
- 5 「『目の見えないひと』になったときにどんな気持

ちがしたかな。案内をしたときはどうだったかな。」

留意点：目の見えないパートナーに難しいことをさせない、不注意な行動は危険を伴うことを前もって指導する。

参考：話し合いのテーマを、信頼に基づく様々な関係(例：家庭、学校、医者と患者、国と国、人間とシステム、人間と環境など)、信頼にともなう「責任」「権利」などに絞り、学年・教科に応じて活用できる。

[現場から一言] 平井先生、小学校2年

疑似体験できる活動に子供は意欲を示し、予想を越えた良い反応であった。人の立場に立って物事を考えさせる場面では、実際にそういう状態に追いこんであげられる活動の工夫の必要性を強く感じた。繰り返し行い、実践力を高めたい。

出典：TEACHING FOR HUMAN RIGHTS SERIES
Ralph Pettman, Australian Government Publishing Service
1986

目次

〈特集〉 思いやりを育てよう	
事例1：目かくし散歩	1
事例2：輪になって	2
事例3：ほしい・したい、必要、当然	3
事例4：部屋の四隅 ― 君はどこ?	4
事例5：自画像	5
事例6：わたしのともだち	5
実践報告「じゃがいもと友だちになろう」	6
講演抄録「やさしいクラスを育てるには」	8
アイディアいろいろ・Q&A集	10
情報コーナー、ERIC1990年会計報告	11



事例 2 :

輪になって

- ねらい：・みんなの前で自分の意見を言えるようになる。
 ・人の意見を聞く姿勢が身につく。
 ・自分自身に価値を見出し、自信と誇りを持つようになる。
 ・他人に価値を見出し尊重できるようになる。

準備するもの：「マイク」(ペン、カップ、茶筒など何でもよい)

展開：

- 1 グループ(7~10人)に分かれ、輪になって座る。
- 2 『マイク』を順番に回して発言していきます。『マイク』をもった人は、課題の文の空いている部分を補って発表してください。

みんなが発言しやすいような雰囲気をつくるために、約束ごとを決めておく(こども自身が話し合っ決めてもよいし、ルールとして説明してもよい)。

例：①一人ずつ話す ②だれかが発言しているときは、他の人はその人の方を注目して静かに聞く ③話したくないときはパスしてもよい ④どんな意見でも決して批判しない ⑤正しいか間違っているかは問題にしない など。

- 3 最初に話す人を決め、一定方向に順番に「マイク」を回す。

「最初の文は『私は今朝〇〇を食べました』です」

(口頭でも、黒板やカードで示してもよい。)

- 4 一周したら、新しい文は別の人から回す。

文例：

a. 導入

「私の好きな食べ物は〇〇です」「私の一番行ってみたいのは〇〇です」

b. 自分自身の価値を考える

「私は自分の〇〇というところが好きです」

「私の母は、私の〇〇というところがいいねと言います」

「私は、怒ると〇〇となります／します」

「私がうれしい／寂しい気持ちがするのは〇〇という時

です」「私は絶対〇〇たく／欲しくありません」

「私はひとりでも〇〇できます」など

c. 他の人たちの価値を考える

「私が友だちっていいなと思うのは〇〇という時です」

「私にとって他の人が必要だと思うのは〇〇という理由からです」「私は他の人に〇〇を知ってもらいたいです」

参考：

輪の中ではまちがった答えはない、何を言ってもいい、他の人の発言を聞こう、といった雰囲気をつくるのがとても大きな意味をもつ。毎日の学級活動の中に「輪になる時間」を決めて、その日に学んだこと、感じたこと、本を読んだ感想など、思うままに発言できる機会をつくといい雰囲気をつくりやすい。教師も輪の中に入って、発言すると同時に、一人ひとりに対して「どうもありがとう」「いい考えね」「あなたのいうのは〇〇という意味ね」「先生もそう思うわ」「〇〇さんもそう言っていたね」といった肯定的な応対をするとよい。

○参加者のひとこと

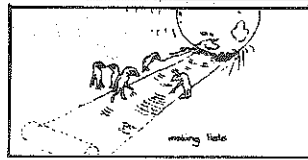
「生徒の立場になってやってみた。『マイク』が回ってくると妙に緊張し、その緊張が『言うならしっかり言わなくちゃ』と思わせ、ただの発表よりも深く自分と対面できたように思う。『マイク』をもっている人だけが口を開くことができ、周りが一斉に注目してくれるというのも発表意欲を高めると思う。年度始めの学級開きの時にさっそく活用していこうと思う。」

(中学校教諭・英語)

出典：TEACHING FOR HUMAN RIGHTS SERIES, 1986



© Elizabeth Cullister, Noel Davis, Barbara Pope 1986



事例 3 :

ほしい・したい、必要、当然

ねらい：・「人間としての権利」について考える。
・「世界人権宣言」に関心をもつ。

準備するもの：プリント「世界人権宣言」（二人あるいは4人に1枚）

対象：小学生（高学年）以上大人まで

展開：

- 1 二人一組になる。二人でほしいものやしたいことのリストをつくる。
「現実的でなくてもいいよ。ほしいものやしたいことを何でもいいから書き並べてみよう。」
- 2 1でつくったリストの中から「絶対必要だ」と思うものを選んでリストをつくる。
- 3 二組ずつ合わさって4人のグループをつくる。2でできた「必要なもののリスト」の中から、当然自分がもつ権利があると思うものを選んで、グループごとにリストをつくる。
「自分にとって当然もつ『権利』があるということは、他の人に同じ権利を認める『義務』があるということでもあるということを忘れないでね。」
- 4 「世界人権宣言」のプリントを配る。
「みんなのグループでつくった『当然の権利』と比較してどうかな？」
各グループで気がついたことを話し合う。
- 5 学級全体で各グループで出た意見を発表してもらおう。
- 6 40年前に書かれた「世界人権宣言」も、この活動で体験したのと同じような過程を経て起草されたことを説明する。

参考：

自分たちのつくったリストと世界的な合意のあるものを比べることにより、多くのことに気づかせることができる。自分たちのリストは「ほしいもの・したいこと」を出発点としているため、「当然の権利」に「言論の自由」「プライバシー」「安心して飲める水」などがはいて

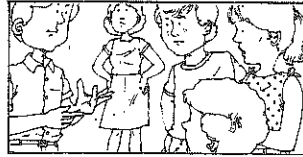
いないだろう。「人権宣言」にあって自分たちのリストにはないものを比べると、ふだん当たり前に受け取っていて、あえて「権利」として意識していなかったものがわかる。自分たちのほしいもの・したいことは、世界中の人がほしがっているもの・したがっていることであることにも気づく。この活動をきっかけに「人権宣言」の内容に興味をもたせるとよい。

応用：

自分たちの学級が世界全体の規則を立案する任務を任せられたと仮定する。ただし、自分たち自身がその世界でどんな立場になるのかはわからない。（あるいは、これから光線によって他所の星へ行くと仮定し、到着するまでに自分の身に何が起こるかかわからない。）年齢、性別、人種が変わっていたり、障害をもっていたり、逆に今の障害がなくなっていたり、どうなっているか見当がつかないという設定で、新しい社会の規則はどのようなものであってほしいか考えてみる。できた規則と「世界人権宣言」と比較する。

【現場から一言】木下先生、中学校理科

このゲーム（活動）の講習を受けたときは、その展開の見事に舌を巻いた。が、同時に、私のクラスでうまく使えるだろうか？ 生徒はうまくのってくるだろうか？ 自分たちの権利だけ主張して指導上困ったことになりはしないか？ と不安は尽きなかった。一方、環境問題に焦点を合わせて理科の授業を展開する中で、自然科学だけのアプローチに物足りなさを感じ始めていた。そんな状態が、思いきって私をこのゲームに走らせるきっかけとなった。「自然」「環境」という言葉さえでくれればいいという簡単な気持ちであった。しかし、その日のホームルームはいつもと違った様相を呈していた。不安はすべて過去のものとなった。生徒たちは生き生きとゲームを楽しんでいる。私は教師としてよけいな詮索をしていたことに気づいた。ゲームの終わりに人権宣言の説明をしてあげたときの生徒の目の輝きが今でも印象に残っている。



事例 4 :

部屋の四隅 — 君はどこ？

- ねらい：・人はみな異なる意見をもつことに気づく。
 ・意見の違いを尊重し肯定的姿勢で対応できる。
 ・誰もが自由に意見を言えることの大切さを理解する。

準備するもの：4枚の紙（それぞれ「はい」「いいえ」「ときどき」「わからない」と書く）

展開：

- 1 教室の四隅に4枚の紙（「はい」「いいえ」「ときどき」「わからない」）を貼る。
- 2 読まれた命題について、賛成の人は「はい」、反対の人は「いいえ」、ときどきはそうだという人は「ときどき」、どちらとも言えない人は「わからない」の表示のある隅に移動することを説明する。
 「正解はありません。あまり考えすぎないで、他の人の意見にまどわされなくてすばやく動いてね。」
- 3 命題を読み上げる。（学年によって様々なテーマが考えられる。答えやすいものから始めるとよい。）
 10題ほどやる。
- 4 グループ（3～4人）にわかれる。命題についてグループで話し合ってから移動する（グループ全員が同じ場所に移動しなくてもよい）。
- 5 各グループで気がついたことを自由に話し合う。
 - ・すべての命題について自分と一緒に移動していた人がいたか。
 - ・仲よしの友だちは多くの命題について自分と共通した意見だったか。
 - ・めいめいで考えて移動したときと、話し合ってから移動したときとは違いがあったか。

参考：

この活動を通して、仲よしの友だちが自分とまったく異なる意見をもっていたり、これまであまり知らなかった友だちが自分と似た考え方をしていたり、クラスのみんなの意見がこんなに違っていると体験できる。異なる意

見を聞くことは自分の考えを見直すチャンスであることに気づき、話し合いの意味や思想や意見の自由について考えるきっかけにもなる。

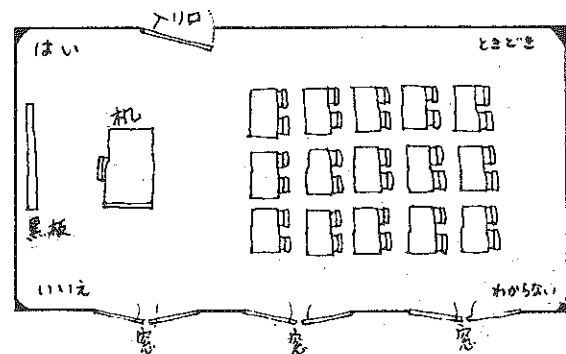
命題例：

- ・果物は何でもおいしい。
- ・自分が嫌いな人には嘘をついてもかまわない。
- ・学校の先生はもっと厳しい方がいい。
- ・女子は男子より頭がいい。
- ・人間はもともと善である。
- ・家族が飢えに苦しんでいたなら食べ物を盗んでもよい。
- ・戦争はどんな理由があろうと絶対避けるべきだ。
- ・金持ちは貧しい人よりも重要である。
- ・高校（大学）入学試験は必要でない。
- ・大人は子どもより物知りだ。

○参加者のひとこと

「時には大勢の中の一人として、時にはほんの2～3人に混じって部屋の隅に立った。『自分ってけっこうみんなと同じような考え方をしているんだな』思ったり、『へえ、そういうふう考える人が多いのか…でも私は…』などと思いながら楽しんだ。教師が理屈を言葉で言うよりも、違いを認め受入れていくことの大切さをこどもは体感できると思った。」（中学校教諭・英語）

出典：ME YOU AND OTHERS, Elizabeth Callister, Noel Davis, Barbara Pope, Brooks Waterloo Publishers, 1988
 TEACHING FOR HUMAN RIGHTS SERIES, 1986



© Elizabeth Callister, Noel Davis, Barbara Pope 1988



事例 5 :

自画像

ねらい：・相手のよいところを見つけて言葉にできる。

- ・他の人を尊重する気持ちをのぼす。
- ・自分自身を信頼するようになる。

時間：1～1時間半

準備するもの：模造紙（長さ1～2m）、布片、色鉛筆
フェルトペン・絵の具など、白紙カード

展開：

- 1 一人に1枚、各自の身長に合わせた長さの紙を配る。
- 2 二人一組になる。一方が自分の紙の上に横たわり、もう一方が、フェルトペンか色鉛筆で相手のからだの線にそって紙に線を引く。
- 3 交替して同様にする。
- 4 できあがった自分の等身像に、自分の特徴や衣服などを布片を張り付けたり、色鉛筆や絵の具などで描く。
「自分の名前も大きく書いておこうね。」
- 5 全員の自我像を教室の壁に貼る。
- 6 グループ（あるいは全体）で、作業中に感じたことを話し合ったり、お互いの作品のよい点を指摘し合う。
- 7 6人グループをつくり輪になって座る。一人に1枚白紙カードを配り、各自名前を書く。
- 8 カードを順番に回す。
「カードが回ってきたら、そのカードにある名前の友だちについて自分が好きな点を書きこんでください。」
- 9 全体で次のような点を中心に話し合う。
 - ・他の人が自分の作品について話しているのを聞いたときどんな気持ちでしたか。
 - ・他の人が書いてくれたカードを読んでいるときどんな気持ちでしたか。

【現場から一言】木田先生、小学校1年生

新学期のクラス開き（オリエンテーション）などで楽しく使えそうです。2年生活科の「大きくなったぼくたち、わたしたち」、1年社会科の「成長のアルバム」でも活用できると思います。また、担任の先生が横になっ

てクラスみんなにいろいろ書かせてみるのもおもしろそうです。1時間の授業では無理かもしれませんが数時間扱いでおこなうといいでしょう。4月に転入生が2人いますのでその紹介に使います。クーピーペンシルなど色の落ちにくいものの方がいいかと思います。

出典：WORLD STUDIES 8-13: A TEACHER'S HANDBOOK
Simon Fisher & David Hicks, Oliver & Boyd, 1987

事例 6 :

わたしのともだち

ねらい：・異なる意見を聴き尊重できる。

- ・友情、友人について考える。

準備するもの：プリント（人数分）

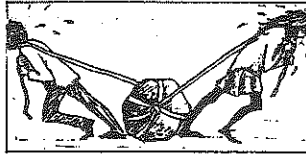
展開：

- 1 各自にプリントを配る。
- 2 各自でプリントに答える。
- 3 二人一組のペアをつくり、互いにプリントを交換して気がついたことなどを話し合う。
- 4 ペアで話し合いながらもう一度プリントに答える。
- 5 3つのペアでグループをつくり、それぞれの結果を見せ合いながら話し合う。
 - ・結果は同じだったか。
 - ・どんな点が同じだったか（違っていたか）。
 - ・どうして同じだったか（違っていたか）。

【現場から一言】伊東先生、中学校英語

こどもの間で友だちに関する問題が起きない日はない。こどもはこどもなりに心のどこかで真剣に悩んでいる。「友だちって何だろう」本当に大切な友だち関係を見出したいながらも、一人になることを恐れてついまわりに流されてしまう。でも、本当の人間関係、本当の友情についてその理想をわかってもらいたい、じっくり考えておいてもらいたい。クラスが落ち着いた状態の時に是非やってみよう活動だ。

出典：ME YOU AND OTHERS, 1988

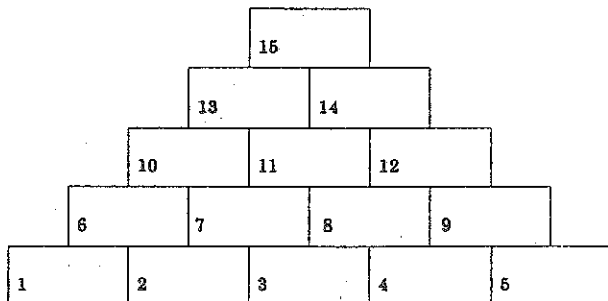


プリント

私の好きなともだちは…

- a 優しいひと
- b 他の人の気持ちに敏感なひと
- c ユーモアのセンスがあるひと
- d 人の話をよく聞いてくれるひと
- e 特別な関心や趣味を持っているひと
- f 寛大なひと
- g 想像力の豊かなひと
- h 生き生きとして情熱的なひと
- i 私の悪いところを許して受けとめてくれるひと
- j 私と一緒にいることを楽しみながらも「ひとりの時間や空間」を尊重してくれるひと
- k 何が正しく、何がまちがっているか、判断する基準をはっきりと持っているひと
- l 他の人のよいところを見つけようとするひと
- m 親切なひと
- n 他の人をばかにしないひと
- o 感じたことを素直に話してくれる人

上の特徴から一番重要だと思うものから順番に選んで、下の「友情のブロック」の空欄を番号の順に埋めなさい。



実践報告

じゃがいもと友達になろう

『ERICニュースレター』の第1号で掲載した事例の実践報告をご紹介します。

報告者 山口珠代先生（東京都練馬区立中村小学校）

(1) 身近な国際理解教育

身近な教材とは、こどもたちにとってありふれたもの、日常的に関わりのあるものをさす。身近なものやよく知っていると思われるものに意外な面を発見したり、利害関係を見出したりさせることによって教材になる。

4年生では、でんぶんの観察のためにじゃがいもを栽培した。3月に種芋を植え、世話をし観察をしてきた。7月には約80キロぐらいの収穫があり、バターをつけて味わった。こどもたちは、約4ヵ月、観察の対象としてじゃがいもを見てきた。もちろんそれまでもカレーやサラダの材料として大変親しみのあるもの、身近なものであったに違いない。そのじゃがいもで、物事はいろいろな面から見るができることを考えさせた。

(2) 指導の過程

① ねらい

- 1 どんなものでも各々特性をもっていて、決して同一ではないことに体験を通して気づく。
- 2 多様な個性を尊重することにより、固定観念にとらわれず物事を見極めようとする。

② 展開

- 1 じゃがいもはどんなものか考える。野菜としてのじゃがいものイメージを思い出させる。
- 2 たくさんあるじゃがいもの中から自分の好きなじゃがいもを選ぶ。
- 3 自分の選んだじゃがいもともだちになる。
- 4 自分のじゃがいもはどんなものか発表する。
- 5 友達になったじゃがいもを箱に戻し、みんな一緒にする。
- 6 みんな一緒になったじゃがいもの中から、自分のじゃがいもを見つける。



7 初めはみんな同じように見えたじゃがいもよく見ると違いがあること、各々によさがあることに気づく。

(3) 評価

- 1 ジャがいもと友達になれたか。
- 2 ジャがいもをいろいろな視点をもって見ることができたか。

(4) 考察

- ① 身近な教材…自分たちがつくってきたじゃがいも、一年中出回っていてよく使われる野菜ということでも身近なものであった。
- ② 異なるものへの対応…初めはじゃがいもを区別せずひとまとめにしたものと考えていたのが、ひとつだけではあるが他のものと区別できるようになり、各々の違いを多様な観点から見ていた。
- ③ 教材としてのおもしろさ…「じゃがいもと友達になろう」すなわち、人間や動物でないものと友達になろうという発想に、初め子どもたちは驚きとまどった。だが、その発想のおもしろさに引きこまれ、今まで単なるじゃがいもだったのが特別な意味をもちはじめると、ぐんぐんと想像の世界を広げていった。子ども自身その広がり驚きながら存分に楽しんでいた。
- ④ ジャがいもを擬人化し、自分とじゃがいもの世界をつくりあげることに夢中になっている姿を見ていると

多少異様な感じがした。異なるものへの対応の一つとして取り上げ、物を多面的に見るという点ではある程度理解させることができた。人間理解の一つのきっかけになった。

）ペットマン氏の研修では

セミナー「思いやり教育」では、じゃがいものかわりに小石を利用して行われました。

(活動の最初に)「どの社会でも、同じ『人間』という生き物にいろいろな形で線を引き、『あの人たち』と『私たち』と区別して考える習慣があります。『あの人たち』は『みな同じ特徴をもつ人のグループ』と考えがちですが、どのような区別であっても、簡単に差別につながります。『外人ってというのはみんな〇〇でしょ』『東南アジアの人って…』『女って…』という態度や見方が差別を増やしていくのです。今から、『差別』に焦点を合わせた活動をします。」

(活動を終えて)「この活動のねらいは、みんな同じだと思っていた人たちでも、知り合いになれば一人ひとりが違うということです。ただの石ころとでさえ仲よくなるのですから、どんな人でも『お友達』になれる可能性を秘めています。これからは、『あの人たちはみな〇〇だ』という言葉を聞いたら今日の石ころのことを思い出してください。」

出典：TEACHING FOR HUMAN RIGHTS SERIES,1986

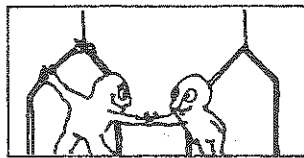
(5) 児童の感想と作品

★おもしろい発見をいろいろ
★身長4cm5mm
★体重1507g
★身長10cm 体重1507g
★おもしろい発見をいろいろ
★身長4cm5mm
★体重1507g
★身長10cm 体重1507g

名前—ジャガイモ 身長—4.5cm
年齢—5才 → どうしてジャガイモは
たん生誕—1989年 2月29日(日)

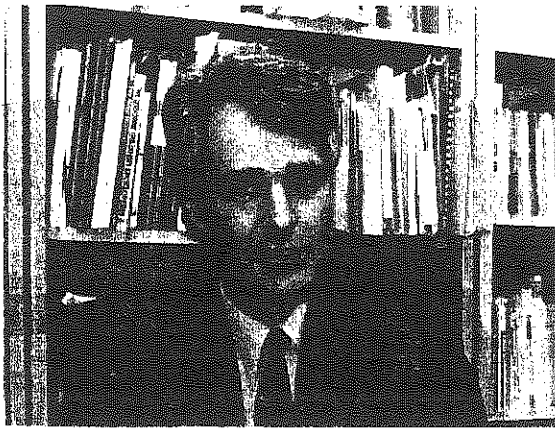
身長は、おれ、4.5cmだから、又もとの
のびて、大分大きくなった。

おもしろい発見をいろいろ
★おもしろい発見をいろいろ
★身長4cm5mm
★体重1507g
★身長10cm 体重1507g



「やさしいクラスを育てるには」

ラルフ・ベットマン



○オーストラリアの人権教育

1981年、オーストラリアで初めて人権擁護委員会が作られると、教師から問い合わせが殺到しました。この委員会なら「人権」あるいは「ひととして正しいこと」

(humanrights)の考え方や教え方について新しいアイディアがあるのではないかと期待からです。これを受けて様々な調査が行われましたが、世界のどこを探しても実際に教室で使えるような教材は見つからず、それなら自分たち自身で何とかしようと、人権擁護委員会の全国学校教育プロジェクトは始まりました。このプロジェクトは様々な意味で学ぶ点の多い有意義なものとなりましたが、最も有意義だったのは、どういった手法や教材に効果があり、どういったものがないのか、そのような違いがあるのはなぜか、といったことを現場の先生の話から明らかにすることができた点です。

委員会では、まず、研究や現場の先生の話を参考に手引書をまとめました。その後、2年をかけて、全国400校600人の先生から実践の体験レポートを寄せてもらい、その結果を2冊の本にまとめました。

最初の手引書は小学校高学年から中学校程度の子どもたちを対象としたものでしたが、実践に参加した現場の先生方の意見から、小学校低学年や学齢前の子どもたち用の教材を開発する必要があることもわかりました。幼い子どもはものごとを分析する力などがまだ充分でないため工夫は必要ですが、これは、幼い子どもたちには人として正しいことを学ぶ力がないということではありません。

○自分への信頼、他人への共感／土台から屋根へ

大切なのは、子どもたちが他人との関わりの中で、相手の身になって感じたり、考えたりする感覚を育てていくこと、また、自分自身もかけがえのない存在であるという感覚を育むことです。この二つの心のもちかたこそが人権＝「ひととして正しいこと」の最も基本となるものなのです。

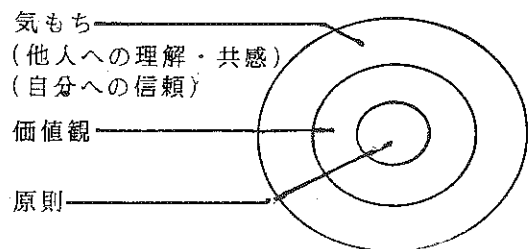
自分に対する信頼と、他人への共感という二つの気もちが芽生えていれば、そこから人間としての価値観が生まれるはずですが、人間としての価値観とは、正・不正、自由、平等、人として心地よいあり方（痛みがない、飢えていないなど）の4つが大事だという視点です。この価値観が自分の行動規範へと発達していきます。例えば『世界人権宣言』に見られる、権利・義務といった原則は、この価値観に基づく行動規範です。

ことばをかえれば、気もちこそすべてのものごとの礎石である、と言えましょう。礎石は真っ先に据えなくてはなりません。家を建てる場合でも屋根を作ってから床を敷く人がいないのと同じです。

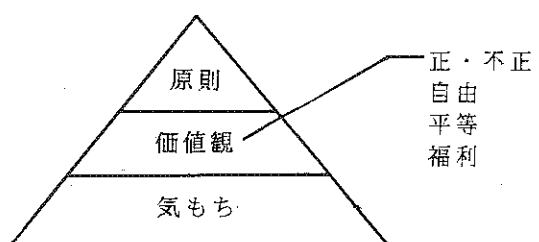
気もち・価値観・原則の関係は、原則を中心とする同心円として表わすことができます(図1)。また、気もちが底辺、価値観が中段、原則が頂点をなすピラミッドに見立てることもできるでしょう(図2)。

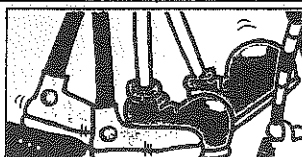
普通、「人権教育」というと、「原則」(権利)から話が始まることが多いのですが、オーストリアでの最大の成果は、土台となる「気もち」の部分の固めることがいかに重要な、が各地での実践から判明したことです。

(図1)



(図2)





たとえば、ある先生が、中学3年生を対象に、どの程度自分自身に価値を認めているか、対人関係でどんな感じ方や見方をしているかについて簡単なテストを行ったところ、この子たちがどちらの基礎も全く持っていないことがわかりました。他人にも自分自身にも価値を認められない子どもたちに「人として正しいこと」を教えるようとして、うまく伝わるでしょうか。結局この先生は、基礎作りのため、幼稚園用の手引きを利用して、子どもたちにとってもたいへん楽しく、意味のある授業をすることができました。

一人一人がかけがえのない存在であると教えることは、実は、私たち教える側がいかに自分自身に価値を認めるかという問題も意味しています。日本でもオーストラリアでも、現場の先生が独自のやり方で授業を進めることはあまり奨励されていませんが、これでは、自分自身をかけがえのない教師であると認識するのは難しく、悪循環につながりやすいのです。

○「二本の脚」

自分自身に価値を認めることと、他のひとたちの価値を尊重すること、この二つの気もちはともに欠かすことができない、基本的な「二本の脚」です。片方は主体性に、もう一方は対人関係に欠かせないものです。他人を全く理解しないまま自分自身であり続けようとする、傲慢になってしまいます。逆に外とのつながりを大事にしすぎると、自分を見失い、他の人と共有できる自分らしさをなくしてしまいます。片方の「脚」がもう一方より長いと歩きにくいのです。西洋社会では、傲慢であるとか、自己中心的であるというように、個人的な部分が表面に出すぎることが問題になっています。日本の皆さんの問題は、他人への尊重が強調されすぎることではないでしょうか。この二つの気もちの間の一種の緊張関係は、人として自然なものです。私たち人間は、二つの気もちをともに育て、どうバランスをとっていかかを考えていかななくてはなりません。

他人への思いやりは、一般に、相手のじゃまをしない、相手を傷つけない、といった受け身がちのものとしてとらえられがちです。個人より集団に価値をおくような社会ではわかりにくいことかもしれませんが、真の思いやりは、苦しむひとを見過ごしにできないときのように、実は行動に移さずには示せない場合もあるという点に注

意してください。

○「思いやり」は教えられるか

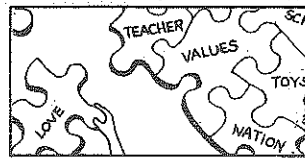
こういった気もちの大切さについて話して聞かせることと、こういった気もちを持つように教えていくということとは全く違います。子どもは自らの体験を通してしか学ばないものです。校庭でけんかがあったときのことを考えてみてください。何もなかったことにしたり、おとなの判断に従わせたりすることで、一応の解決を図ることはできますが、それでは、子どもたちにとって得るところはありません。先生の手を借りながら、どうしてけんかになったのか、原因や背景などを子どもたち自身が考えて解決することこそ必要なのです。

教える側の態度や教え方によっては、意図とはまったく異なることを学ばせてしまっていることがよくあります。例えば、教師は言論の自由やプライバシーの権利などについて教えているつもりでも、「その後ろ、黙りなさい」「そこで手紙を回したひと、みんなに聞こえるように読みなさい」といった態度では、その授業から生徒が実際に学ぶのは、権力についてであるということになってしまい、自分で価値を判断し、自分を律していくための力は何も身にはつかないのです。教師のこのような態度は「構造的偽善」と呼べるのではないのでしょうか。

教室は教師の心の反映であることを、どうか忘れていってください。他人を信頼できない、恐怖心の強い教師のクラスは、いつの間にか小さな軍隊にかわってしまいます。逆に、皆さんが、ひとりひとりの子どもを心からかけがえのない存在としてとらえ、接していれば、子どもたちは、算数の授業の中でさえ、ひととして正しいことのもっとも大切な部分を、皆さんの態度から学びとっていくことができるのです。

ラルフ・ペットマン (シドニー大学政府・行政学部助教授)

1947年オーストラリア生まれ。1967年アデレード大学卒業。ロンドン大学より国際関係論で博士号。豪・米の大学で教鞭をとった後、1980年前半、オーストラリア人権擁護委員会全国学校教育プログラムの総責任者として活躍。このプログラムの成果が高く評価され、国連人権センターに招かれ世界中の小・中学校で使える手引書(5ヶ国語)の編集に寄与した。趣味は空手(4段!?)。



アイデアいろいろ・Q&A集

Q 「輪になって」の活動で、こどもたちがふざけたり、いい加減だったり、はずかしがって何も言えないときはどうしたらいいですか？

A 心配しないことが一番大切。こどもは、話すだけでなく、聞くことを通しても学んでいる。「自分ひとりが気はずかしさや迷いを感じているのではない」ことに気づき、互いに共感できる雰囲気の生れることが大切。積極的に発言することも刺激されて、他のこどもも次第に話しやすくなる。時間をかけて、自分にも他人と分かち合えるものがあることに、こども自身が気づいていくことがポイント。

Q グループ活動に適当な人数は？

A グループの人数は多くて7人。これ以上だと、席を離れたり自分の考えごとにふけるこどもが出る。

Q グループ分けのときに気をつけることは？

A こどもをいつも同じ基準で分けないことが大切。いつも男子と女子で分けていると、「男と女は違う」と必要以上に強く印象づけてしまいかねない。着ている服の色やボタンの数、ペットを飼っているかどうか、生年月日など毎回異なる基準を利用するよう心がける。

Q こども自身がクラスのきまりをつくると、厳しすぎるものができはしないか？

A 「ほしい・したい、必要、当然」の活動を先にやる。きまりをつくった後で、「本当にそれでいいと思う？」「あなたたちが〇〇の立場だったら、こういうきまりがあるとどんな気持ちができるかしら？」と、具体的に例をあげて問いかけ、熟考を促す。こどもに欠けた視点を補って問いかけるのが、教師の大きな役割の一つ。

Q 話し合いをもっと活発にしたいのですが？

A ①手にとれるものを活用（道具、絵、質問用紙、「マイク」など）②視覚教材を活用（写真、ポスター、イラスト、統計グラフなど）③課題は具体的、明確に与える④議論の余地のある課題を選ぶ（意見の分れそうな問いを選んだり、特定な立場を役割分担して意見の違いが出やすいようにする）⑤比較・対照・選択・理論化（各自で序列化したり選択してから、理由を説明する）⑥体を使った活動を利用（ゲームやロールプレーなどを体験・見学した後で、どんな気持ちか、何が起きたかなどについて話し合う）⑦むずかしすぎずやさしすぎないもの（ある程度背伸びの必要なもの、但しやる気をなくすほどむずかしいのは禁物）。

☆新聞・雑誌を使って

新聞や雑誌の中から、ひとがひととして正当な扱いを受けていない例の記事をあげる。「何が起きたか」「この人(たち)はどんな権利を失ったか」「それはなぜか」についてグループ・全体で話し合う。

☆輪になって

「これまでに他の人にしてもらった中で一番すてきなことは〇〇です」「これまでに他の人にしてあげた中で一番いいことは〇〇です」

☆アウトサイダー

8～10人のグループをつくり、できるだけ小さな輪になって隣どうし互いに腕を組む。「アウトサイダー」を1人選ぶ。「アウトサイダー」は、輪の外からなんとか中に入ろうとする（暴力は使わない）。全員が順番に「アウトサイダー」になり「仲間はずれ」にされたときの気持ちを体験する。

☆ともだち

一人ひとりハート型の紙に「ともだち」や「友情」について思うことをできるだけたくさん書き込む。その中で特に大切な6つには〇をつける。他の人と交換したり理由などを話し合う。全員の「ハート」をさらに大きな「ハート」に貼り掲示する。



情報コーナー

○こんなことしています

〉〈地球人教育〉をすすめるために

在日本韓国YMCAアジア青少年センターで国際文化プログラムを担当しています。通常は韓国語や韓国文化講座、在日韓国・朝鮮人の子どもたちのクラスのお世話をしていますが、最近〈地球人教育〉の必要を痛感し、環境教育・開発教育のプログラムを進めることに力を入れています。関心をおもちの方はお問合せ下さい。

[1991年度プログラム]

環境教育

①自然の学校 (4月～92年3月)

小学生対象の月例野外活動「水と人間—多摩川をたどる」。

②第2回野外活動リーダー養成講座 (6月)

③子ども地球クラブ (10月、92年2月)

国際理解

④韓国歴史の旅 (8月中旬) 18才以上20名

扶余・公州など百済文化を探る忠清南道の旅

⑤地球市民講座 (92年2～3月)

「東南アジアと日本」(仮題)

⑥ベトナムスタディツアー (92年3月下旬)

18才以上6名。

ホーチミン市の病院・学校・農村を訪門。

発信：森 良

在日本韓国YMCAアジア青少年センター

〒101東京都千代田区猿楽町2-5-5

TEL03-3233-0611

〉「ゲームで学ぶ国際理解」

京都の小学校国際理解教育研究会に所属し、開発教育や国際理解教育の具体的な授業実践に取り組んでいます。異文化体験ゲーム『パファパファ』を是非実践してみられてはと思います。自分が異文化の中に入ったとき、どんな気持ちもち、何を感ずるかを実際に経験するのがねらいです。対象は小学校中学年から一般、所要時間90～120分。(『指導者の手引き』を含む実践記録をERICに送っていただきましたので、ご希望の方はご連絡下さい。)

発信：石井 正 京都市立出水小学校
〒602京都市上京区浄福寺通榎木町上ル

○お知らせします

〉海外教員グループと日本人教師の合同宿セミナーへの参加希望者募集中

6月7日(金)～9日(日) 御殿場のホテル(予定)。青年海外協力協会では「21世紀のための友情計画」(国際協力事業団事業)の実施協力団体として毎年海外から3～5グループ受入れています。今年度はインドネシアと中国(11月中)から教員グループを受入れ、それぞれ滞日中に日本人教師との「合宿セミナー」(通訳あり)を開催します。希望者は早目にご連絡下さい。

発信：出沢尚子 (社) 青年海外協力協会

〒106東京都港区南麻布5-10-24

第2佐野ビル702TEL03-3446-3651

担当 佐々木

○一緒にやりませんか

〉「地球規模で考え、地域で行動する」

「地域で考え、地球規模で行動する」をモットーにネットワークづくりと情報交換環境・人権・開発・町づくり・福祉・エコロジー・国際協力などをテーマに国際意識やボランティアリズムの向上を図り、地球社会への貢献をめざしています。自治体・政府職員、教員、青年海外協力隊OB、会社員、NGOスタッフらが集って、浦和YMCAを拠点に定例会(学習会・実際体験会)を開催しています。(昨年10月にはERICと共催で「グローバル・セミナー」も開催。) 皆さんも仲間に入りませんか。

発信：立岡浩 (埼玉クロワッサンの会)

〒330大宮市北袋2-186AB-102

TEL048-648-9460

○資料のご寄贈ありがとうございました

これまでにご寄贈いただきました資料をご紹介します。

『児童の権利条約—21世紀を新子どもの世紀に』下村哲夫編著、時事通信社

『未来を奪われた子どもたち』甲斐田万智

子、明石書店

『人権学習を創る—偏見と差別の社会心理学』中川喜代子、明石書店

『外国人をホームステイさせる本』河村千鶴子、中経出版

『平成2年度小さな国際人』東京都板橋区立緑小学校

『帰国子女とそうでない子どもたちのための〈帰国子女教育〉1989-90』横浜市立美しが丘小学校

『研究紀要<子ども一人ひとりが、広く世界に目を開き、国際的に協調できる心情豊かな子供を育成をめざして>』横浜市立つつしが丘小学校

『国際化社会に生きる生徒の育成』

『国際化社会と社会科教育の役割』

愛知県額田中学校現職教育委員会

『国際理解教育研究紀要』『年間指導計画』

『学習指導案』『第1回海外派遣生報告書』

『第2回海外派遣生報告書』額田中学校

『世界の中の日本—国際社会に生きる—』

財団法人愛知県国際交流協会

『OUR FRIENDSHIP WITH KENYA ケニアから』

の出発—1991—』少年ケニア友の会・芦屋市立山手中学校

『国際理解教育—グローバルな視野をもつ』

子女の育成』順心女子学園中学高等学校

『研究紀要第15集(「国際理解科」学習指導資料他)』東京学芸大学附属高等学校

大泉校舎

『国際理解教育研究発表会要項<研究とその実践>』宮崎県立宮崎北高等学校

『国際理解教育の研究：推進校・第一年度の報告』都立八王子高陵高等学校

『帰国子女教育の現況』練馬区海外帰国子女教育推進委員会・練馬区教育委員会

『横浜市緑区北部帰国子女教育推進協議会実践報告』『同会報 STREET』

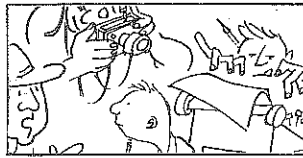
ビデオ『THE・みどり』横浜市緑区北部帰国子女教育推進協議会

『在日外国人の人権を尊重する教育をすすめるために—国際理解の視点から』

『読本<にんげん>を生かした授業の記録』

大阪市教育センター

『あおいびわ湖』『あおい琵琶湖』『あお



いびわ湖（環境学習ノート）『琵琶湖と自然』滋賀県教育委員会生活環境部『環境教育実践事例集』（1～4集）滋賀県教育委員会
『大淀川の教材化と指導計画』宮崎市教育委員会
『国際理解教育のための共同研究報告書 総集編』千葉大学教育学部国際理解教育研究会
『海外子女教育研究』（創刊～第126号）東京学芸大学海外子女教育センター
『開発教育ガイドブック：教材の研究と紹介』国際協力推進協会編、明石書店
『小学校国際理解教育の授業』岸尾祐二他編著、東洋館出版
『お話 近代の歴史 隣りのくにと日本』稲垣有一著、一文字工房

○今、ERICでは…

〉オーストラリア研修ツアー

日程は今夏8月21日～31日、訪問先はブリスベンとアデレードを予定。定員15名。すでに5人の参加申込みがあります。ご希望の方はお早めにご連絡下さい。問合せ・申込みは、ERICへ。

〉『授業研究』91年度新連載に「楽しい授業のレッスンバンク」が登場します

明治図書教育雑誌に、ERICが楽しい授業作りに役立つ事例を紹介していきます。ERICニュースレターの紙面で紹介できる事例数は、どうしても限りがあります。より多くの資料をより多くの方と分かち合い、実践に役立ててほしいという願いに、これで少し近づけそうです。ご利用下さい。定価500円。

○プロフィール

ERICニュースレターをつくる人々

読者の皆様から「ERICの活動やニュースレターづくりにかかわっているのはどんな人たち？」という質問をいただくことが多くなりました。そこで今回はERIC事務局の面々をご紹介します。

杉山 尚子

前の仕事をやめて3年間アメリカで学生として過ごし、社会復帰して最初の職場がERIC。アメリカでの体験（グローバル教育や開発教育、ボストン子ども博物館との出会い）を原動力にスタートし、メ切に追われて「フル回転」を続けている。日ごろはそんな実行力を秘めていると感じさせないほどのしずかなひと。ニュースレターづくりの実質的な作業は全て彼女が行っている。電話の応対もこのひと。

関 典子

ふだんは自宅で翻訳をしているが（ERICで出版予定のWORLD STUDIES 8-13とTEACHING FOR HUMAN RIGHTS SERIESを翻訳中）、事務局が忙しくなると駆けつける。カナダでの高校生生活（全校生徒200人が55ヵ国出身の寄宿学校）が原点で、「下手な鉄砲も数撃ち当たる」が信条。言葉の達人で、ニュースレターづくりにおいて頼りになる。「お友だちになる」のが大の得意で、マスコミから文部省まで、顔の広さは抜群。

吉田 新一郎（ERIC事務局長）

中学卒業後、高校・大学時代を外国で過ごす。1982年にオーストラリアのシドニーにある「アイディアズ・センター」にヒントを得て、ERICの構想をねりはじめた。（現在ERICにある外国資料はほとんど彼が集めてきたもの）。世の中の流れる先を読むのがうまいが、その才能を活かして金もうけをしようという発想がないのは、やりがいのない仕事はしたくないから。勤務時間は5AM～2PM(?)。「楽しく」「人と人のつながりを大切に」「誰もが参加できる」企画づくりに頭をひねっている。

○第1期ERIC1990年会計報告

収入の部

[事業収入]	
1990年オーストラリア研修	1,895,000
[助成金]	
庭野平和財団	1,200,000
大竹財団	500,000
豪日交流基金	200,000
国際協力推進協会	100,000
[借入金]	4,317,611
合計	8,212,611

支出の部

[広報費]	
ニュースレター編集費	1,404,000
印刷費	592,444
発送費	310,000
[教材開発費]	
レッスンバンクの翻訳・編集	1,000,000
[事業費]	
オープニングセミナー	1,180,373
1990オーストラリア研修	2,049,820
[事務局経費]	
賃借料	480,000
事務用品	101,331
資料購入代	190,792
水道光熱費	47,310
交通費	599,900
通信費（郵送・電話代）	246,163
会議費	10,478

（第1期事業費事務局人件費は

計上していません）

合計 8,212,611

繰越の部

次年度借入金繰越 4,317,607

ERIC International ERIC NEWSLETTER No.6 April 1991
国際理解教育・資料情報センター

〒114 東京都北区田端1-21-18 津田ビル1F 電話—03-5685-1177

このNewsletterの印刷・編集費用の一部は大竹財団からの後援です。

リサイクルを考慮して、印刷用紙に再生紙を使用しています。